

『社会教育』全日本社会教育連合会／一九五六年十一月

青年学級学習課程の資料を

どう生かすか

矢口 新

はしがき

「青年学級学習課程編成資料」が文部省から出された。本誌の七月にのつた高橋社会教育官や、現場の指導者である笹島保氏や、多分学識経験者の代表という意味であるが、千葉大学講師の確井正久氏等の様々な意見を見て、私にも意見を述べろということである。別に私として述べなければならぬという程のことでもないけれども、あんまり力一助にならないで物を考えることが必要ではないか、そうでなければ青年学級の学習内容を充実するという現実的な営みは生れて来ないのではないかと思うので、そういう点について述べてみたい。

(一)

この資料が誰のためのもので、何のために出されたかということは一応文部省の或は小和田社会教育官や高橋社会教育官の言うとおり聞いてもよいであろう。思想統一をねらった、教育の画一化をねらったというような感がするなどといってみてはじまらない。事実今となってはそんなことで思想統一が出来るはずもないし、教育の画一化

も出来はしないであろう。若しそれで統一され、画一されるなら、される方がよっぽどどうかしているといわなくてはならぬ。われわれがそういう統一や画一の中に入らないという自信をもつことが第一の問題であって、あまりそういうことでノイローゼにならない方がよいと思う。

(二)

所で、こういうものが出たら、実際に現場で、これをどう受けとるであろうか。まず現場若しくは現場に近い指導者たちはどうであろうか。これはよいものが出た、青年学級で今まで何をやってよいかわからなかったが、これからは何をやらよいかかわかる、これで安心、という人もいるであろう。どれ位いるか知らないが、私が今までであった人の中にはそういうものを求める人がかなり多くいた。この資料がまず第一にこういう人々に対して安心感を与えるものであるというところは疑う余地がない。この点で文部省は大きい功德を施しているのである。

併し実は、文部省がやったことがそういう所に意味があるとしたら誠に悲しいような気がしないだろうか。青年学級は、文部省のお役人たちがしばしば言っているように、青年が自主的に勉強する場所なのである。自主的に勉強するということが、どういう形で、何を勉強することなのかということとはむづかしいことであるが、ともかく、何をやってよいかわからないという指導者が居り、それらの人々が自主的に考えるより、文部省というものに指示を仰ごうとしているということとは、青年学級に関係する限り矛盾であるようである。そしてそういう人々にこの資料がもてているとしたら、文部省は自殺したことになりはしないか。これは文部省の欲する所ではないことは言うまでもな

い。

併し何をやったらよいかわからない人々は今まで何をやっているのだろうか。恐らく、そこらに普通にある青年学級を見て廻って——もちろん見て歩いてても大したものがある筈がないから納得のいくようなこれだという程のものが見つからなかったに違いない。それで結局文部省に指示を仰いでいるのである——ともかく何となくやっているものであろう。何となくといっても実際にはまたそれに種々な考え方のものがある。何となく青年を集めて、何となく話し合いをさせているというのもある。何となく青年を集めて、国語や数学や珠算やペン習字を何となく学習させているのもあれば、いろいろである。

そこでこの資料が出たので、やる題目のようなことはきまった。これでやれば安心というわけである。何となくではなくったわけである。否そういう気がするけれども、何となく以上に実際に安心出来るようになるかどうかは怪しいような気がする。どの単元を見ても、どれもこれもむつかしくて、何となく、題目のようなことをしゃべる程度に終りそうな気がする。今の青年学級の教育力である資料の単元にあることを教育出来る人をどこからつれて来ることが出来るかというところが心配である。若しそうだとすると、やはり何となく、単元の題目のようなことを中心にして、その周辺をまわっているという学習になりはしないか。そんなら、今でも大体そういう状態だから大してかわりはしないというような気がする。

(三)

学習課程の資料には、いかめしい単元とその内容があげられているが、実際にはそういうことをやっているといえればやっているといっているといっている。

例えば単元「人間の**本質に対する理解**」という所のねらいを見ると

「個人の尊厳と価値を理解させるために、各個人の人間としての本来の価値と人間の人格は最高の価値があり、人種、信条、性別、社会的身分または門地によって差別すべきでないことをとりあげる」となっているが、こういういかめしい、哲学の形でこのことが知識体系としては教育されていないけれども、青年たちの話し合いにも、青年学級の講師の話しの中にも、随時随所にこういう内容のことは取扱われ、青年たちも、そう考えるように指導されていることは間違いない。それは極めて具体的な事柄の中で取扱われ、考えられている。例えば、家族生活の問題の中で、長男や二三男の問題に関し、嫁と姑の間柄に関し、或は世界の平和の問題の中で、こういった人間の本質に関する見方、考え方は養われていっているのである。そして、それは生活の実践の問題に密接に関連しているから、かなり力強い考え方として養われているといつてよい。

尤もそういうことを全く話し合ったり学習したりしないで、ペン習字ばかりやっている青年学級もあるから、そういう所では青年はそういう問題を考えないが、多少、青年の生活とか運命とかを考えている青年学級ではこういう問題を理解しつつあるといつてよいであろう。

併し何となく、農村の家族の封建的性格とか、嫁と姑との人間関係とかを現象的にのみ話し合ったりしていたという場合には、折角の考え方もただ現象に関して断片的に取扱われるだけになり勝ちで普遍的な原理としての自覚が乏しいこともある。ただ嫁と姑の問題についての感情的な正義観の程度にとどまることもある。それが人間の**本質に関する理解**からだという哲学的原理を基礎にして話し合われるなら一層力強いことになるであろう。

こう考えて来ると、青年学級で現在行われていることを、少しいか

めしく表現しただけだというように考えられる。その点からいえば何もそう大したものではないのである。

ただ大したものだと感じさせるのは、その内容構成の考え方の古くささである。これだけではどうしても非難に値するようである。青年学級ばかりでなく、学校教育においても教育内容の編成に関する考え方は、最近著しく進歩している。そういうものから凡そズレているのが、この学習課程の資料の考え方であって、大体三十年前の考え方であろう。戦争前の青年学校よりも一つ前の時代の考え方がみられるのは一体どうしたことなのか。

(四)

その古くささの目立ったのが、上にあげた「人間の**本質に関する理解**」という單元において最もよく現れている。これを單元というけれども凡そ單元というにふさわしくない。今ここで單元論をやる気はないけれども、單元というのは、生活の中における具体的な問題をとらえて構成するのであって、人間の**本質に関する理解**というような知識的な認識的な問題の系列ではないのである。ここでは單元というのをそういう風には使わなかったといわれればそれまでであるから、それ以上言わないが、そういう単元の定義の問題としてでなく、青年学級という勤労青少年の学習の場において、現に働きつつある青年が、自分の生活をふりかえり、そこに材料をもとめて、これを分析し、反省し、そこから一定の体系的知識を得て来るという学習をさせるのが本道であるとするならば、その学習の構え方は、この資料のような構え方とはちがった、最近の新しい單元学習がねらっているような構え方をしなくてはならぬのではないだろうか。

文部省自身もこれ迄しばしば青年学級の構え方に一般論としては、

上に私のべたようなことを言っていたような気がするのだが、それがどうして、このような学習課程の資料となつてあらわれたのだろうか。これでは、どうにも素人くさくて、お話にならないような気がするがどうであろうか(暴言多謝)

(五)

こういうものを見て、安心する現場も多いことは私も認める。しかしこれまで文部省が努力して来た所は、そういう現場、つまり端的に言えば、勤労する青少年を集めて来て、何か説教をしようというような観念的教育を考える一群の大人たちを啓蒙しようということであったのではないだろうか。だからもう少し進んで、学習の内容や方法を示す場合も、やはりその啓蒙的精神を貫いてもらいたかったと思う。ここでこういう観念論が飛出すのでは、「百日の説法屁一つ」ということになりかねないように思われる。

(六)

私は人文に関する最初の單元一つを問題にしただけであるが、それはすべてについて言えることである。第二の市民の権利と責任の問題でもこういう形でなく、青少年の生活の中における問題をとりあげたと例えば選挙とか、青年団の仕事とかをとりあげ、そこにおいて、具体的な問題の考察の原理として、権利とか責任とかがあげらるべきであろう。その他すべてについてそうであつて、一々とりあげてはきりが無いが、宗教的情操の涵養などということとは全然構えがかわらなくてはいけないう。情操の涵養という理屈があるのでなく、その生活と実践をどう行くかが問題であり、その生活の実践の中で、自覚の問題として理論的認識もあるべきであろう。そういう構え方にな

っているとは、こう単元のつくり方ではどうしても思えない。

これは人文ばかりでなく、社会に関しても自然に関しても同様であり、芸術や体育保健についても同様である。青年学級は、学校教育とは異なるというあのかつての勇ましい命題をもう一度思い起してほしいと思う。それが単なる命題であってはならず、この学習の構え方の所で如実に生きて来なくてはならぬものであらう。

社会に関するものは、人文に関するものと似たようなものであるから、ここでは省き、自然に関するものを一寸考察してみよう。「自然とわたくしたちの生活」という名前の単元があるが、これは文字通りわたくしたちの生活の中における自然をとりあげるべきで、こういう構え方では、自然とわたくしたちの生活をいたずらに抽象して觀念の世界の中へ迷いこんでしまうだけではないか。自然と産業というのも同様である。農業生活の中に自然があるのであって、それこそ、自然と私たちの生活という問題であり、その中に気象のこともあれば、空気や水や生物の問題もあるのである。

こう考えて来ると、この学習課程の資料は理論的に矛盾があり、理念がない。一貫性がないということになるのではないか。

(七)

働く青少年の芸術心の養成や健康の維持についての構え方は、学校とは全く異なるべきではなからうか。芸術に関する単元としてあげられている芸術と私たちの生活とか、芸術の鑑賞と批判とか、芸術グループの意義と活動とか、そういった単元をおくという構えはどうも根本的にセンスにちがいがあはしないか。働いている青少年がその中で何か一つ、或は二つ芸術的活動をし、鑑賞の世界に実際に入り、自分の生活の中に芸術を発見することが大切であらう。その活動を通じて

一般的な芸術論にも入るのであらう。各単元の主題を見ると、その一般的な芸術論に類するものが表に出ていて、こういう構えでは、働かないで芸術評論家になる勉強でもするような構えではないか。その二つというのは、一つ一つの分野に分れているが、それももっと具体的な活動が考えられなくてはやはり評論家的な学習であって、働く青少年のものとならないのではないか。

(八)

職業教養部門についてもこれは言えることである。通俗的考え方で職業について学習することが實際生活に即しているという考え方があがるが、そんなことはないので、職業についての学習も現代の学校教育の学習は一般に観念的な学習以外の何ものでもない。例えば、工場で何か一寸した機械の部品を生産するにしても、それが生産であるなら、原価計算にもとづき、どれ位のスピードでそれを仕上げ、どの程度の仕上げにするかも割り出されて来るのである。大して重要でない所に時間をかけて、馬鹿でいねいなけり方をする必要はないわけである。そういう所に、いろいろと働く現場の問題が生じて来る。そういうことを抜きにして、旋盤で棒をけずるのはどうするのだということだけを学習しているのではやはり、学校の教育であり、現場からは抽象されている。つまり観念的なのだ。

現場の問題の中で技術の問題をとらえることが今迄どれ位なされたかという点、そういうことは殆んどないのである。だから働く現場における技術教育の内容がどういふものかということについては、われわれは殆んど無智である。そこで、職業教養についてのカリキュラムをつくらうとすれば、学習課程資料のようなものにならざるを得ないであらう。

例えば、農業に関するものの中で、農業の総合的な知識と技術について、主題に「**わが家の農業経営改善**」というのがある。こういうことについて若し具体的にやるとすると恐らく、第二單元以下全部が関係することになる。それを一つ一つ経営改善の問題として考察して来て、やがてわが家の農業経営改善の問題ということも考えられるのである。そういうものがない一般論はあまり意味がない。一般論自体がいけないのではない。その学習の構えが、ちがわなくてはならぬということなのである。若しこういう考えだと、どれも皆通り一ぺんの概論になるおそれは大いにある。たとえ青年たちの話し合いであつても、概論的な話し合いになる恐れがある。

もう余白がなくなつたから、これでおしまいにしなければならぬが、要するに、青年学級は、理念はよいが、実力はない。実力がない一番よいあらわれは、権威ある文部省で出したカリキュラムが、理念と合わない借り物でしかないということである。

これはしかし無理もないことで、実力はこの程度で、本当に働く青少年のものとするには、ここから出発するのである。今の日本の働く青少年教育の一般的レベルはこの辺なのである。

これを克服し、これから新しいカリキュラムを生み出すのは、現場と文部省の協力以外何もないのである。そしてそれは、頭で考えることとでなく、実践を通じて、考えることである。実践をまとめて新しいものをつくりあげる努力が、今迄あまりになさすぎたのではないか。現場の具体的なものがどれだけ整理されつみあげられ、そして文部省でまとめられたらどうか。そういう仕事を考える必要があるかもしれないか。それが、この資料の次のものを生み出すよい手がかりになるであろう。

(国立教育研究所所員)